

にしよとしたものである。そして此の授記は第三章（譬喩品）の舍利弗の受記に始まり、第六章（授記品）の摩訶迦葉、須菩提、迦旃延、目犍連、第八章（五百弟子受記品）の富楼那・阿若憍陳如・優樓頻螺迦葉・迦那迦葉・那提迦葉・迦留陀夷・優陀夷・阿菟婁駄・離婆多・劫賓那・薄拘羅・周陀・莎伽陀・第九章（授学無学人記品）の阿難・羅睺羅迄・個人名を挙げて授記が語られている之等の比丘衆は釈尊の直弟子であり、教団の主力となっていた実在の比丘達である。之に続くのが第十一章における提婆達多の授記である。提婆達多は歴史的事実として釈迦牟尼及び教団に対する異端者であった。この提婆達多の授記を二乗作仏を示す比丘衆の授記の次に挿入すると同時に、文殊師利によって法華経の教化を受けた竜女の変成男子・作仏の様相を示して、第十二章（勸持品）の摩訶波闍波提尼、耶輸陀羅尼の授記に関連せしめている。即ち、法華経の主要な思想としての二乗作仏を先づ男性である各比丘の授記をもって記述し、原始教団以来悪人とされ、教団の異端者である提婆達多の授記を以て之をしめくくり、女性に対して

は大乗仏教における重要な問題とされてきた変成男子の思想をもつ竜女作仏をポイントとして、摩訶波闍波提尼、耶輸陀羅尼の授記をもって比丘尼衆の授記を代表せしめて、法華経における授記の配列が整えられるという結果をもたらすに至ったという事が出来る。此処に第十一章（見宝塔品）と第十二章（勸持品）との文脈を敢えて分断してまで提婆品を挿入した最大の要因を見るものであり、法華経における提婆品の位置は「授記」の配列によって決定されたものであると推定し得るものである。

日蓮聖人思想における 開眼供養の理念と論理

伊 藤 瑞 敷

右表題の下に開眼供養について言及されている回向功德鈔、真開眼迦仏御供養逐状、草木成仏口決、木絵二像開眼事、四条金吾釈迦仏供養事などの諸御書を考察し加えて観

心本尊抄など主要御書の思想内容を斟酌して明らかとなつた諸点を要約すると次の如くである。開眼、とは一般的には可見有対色なる三十一相を具備した画木の仏像に、仏の不可見無対色なる梵音声の一相（＝仏の心法）すなわち仏の魂魄（＝主体的精神）を何らかの形で証し入れて三十二相を完具せしめ、而して画木の仏像を媒介として仏の實在性を環境世界の中に保持することである。開眼、とは具体的に木絵の仏像に、世間に衆生利益の作用を實現しつつある仏の御意たる法華経を仏の心法（＝主体的精神内容）であるとの信をもつて読み入れる、証し入れる、あるいは印するといふ形で表象し、而して木絵の仏像に仏の實在性の根本として世間に作用しつつある法そのものたる法華経を具体化せしめ、木絵の仏像をして生身（＝覚悟の根本内容たる妙法に基礎づけられ、妙法を学んでいるといふ實在性および實在感を伴なう）の教主釈尊として實現せしめることである。開眼、とは抽象的には死（せるもの）の成仏・草木成仏・非情の成仏・蓮華の成仏を意味する。開眼、供養とは開眼のための企投的実修であり、客体としてある草木など

の非情（＝画木の仏像）に仏を具体化するモメントであつて、法華経に依るべきものである。すなわちそれは端的には主観者としての衆生（＝法華経を悟れる智者）が自らの仏の具体化におけると同様の信により、釈尊の因行果徳の二法を具足する妙法蓮華経の五字の受持（＝南無妙法蓮華経）に依る供養を実修することである。開眼、の理念的根拠は非情成仏の可能性といふ形で把握されている。非情とは如来の側からいへば寿量品の釈尊が如来秘密神通之力（＝如来の含目的々作用、空用）により自己矛盾的自己限定的に外化したものであり、したがって真実の相のもとには釈迦如来の御身である。それゆえ寿量品の釈尊はその当体が妙法蓮華経の蓮華といふ非情としての具体的事物にことよせての概念によって象徴的に表顕されうる如く、元よりそういう非情にまでそのものの主体性として定着し本来の態に立返るべく具体的にはたらしきかけているといふ生きた事実を自己本来の有りうべき在り方としている。すなわち非情とは非情の側からいへば本来の態としての仏と矛盾的に在りながら而も本来の態としての仏といふ根源的事実（＝

仏性)を孕んでおり、恒にそれにはたらきかけられているという潜在的な宗教的事実において仏という根源的事実に相即している。要するに非情もまた十界互具、一念三千の論理の適用範囲の中にあり、互具の事実において成仏の可能性を内在している。開眼供養(非情成仏のための供養)の理念的根拠は供養の実修において主観者の主体的依拠となる法華経に求められている。法華経とは色心不二なる絶対的な仏(壽量品の釈尊)の御意(悟りそのもの)が而二として相対的に施設されたもので、衆生利益の作用を具体的事実として有するところの、そのままで世間に実現しつつある仏の御意である。したがってそれは仏の根源的事実たる本質面としての智慧(五眼)と仏の宗教的事実たる主体的作用面としての方便(三身)とを統一しておりその統一を生きた事実とする悟りそのもの法そのものの現実である。かくして画像、木像の仏の開眼供養とはそういう意味での法華経に限定されるべきものである。ただし非情は本来分別しえない妙法蓮華経(悟りそのもの法そのもの)にあって一往分別せられたものとし

て語られるところの法華経(妙法の具体的事実としての如実を象徴する非情としての蓮華にことよせての概念)を媒介とし、而して自己がそのまま自己の主体性たる妙法蓮華経に立返る(南無妙法蓮華経)べきものとして存在するからである。開眼供養の基調として潜在している論理は次の如く要約的に把握しえる。色法(非情、形相としての物質的存在)と心法(魂魄、自性としての精神的存在)とを総合統一する色心不二なる主体、すなわち如是相(有限にして実体的なる特殊)と如是性(無限にして無実体的なる普遍)とを総合統一する如是体(無限にして絶対的な主体たる具体的普遍)とは、一念三千の論理にて表示される互具という宗教的事実(仏そのものリアリティ)である。そしてそういう宗教的事実の実現はその実現と同一事である、仏そのもののリアリティ(妙法蓮華経)の自己実現としての南無妙法蓮華経(事の一念三千)に必然的に課せられている。